65 徳次郎宿～大沢宿

栃木県宇都宮市

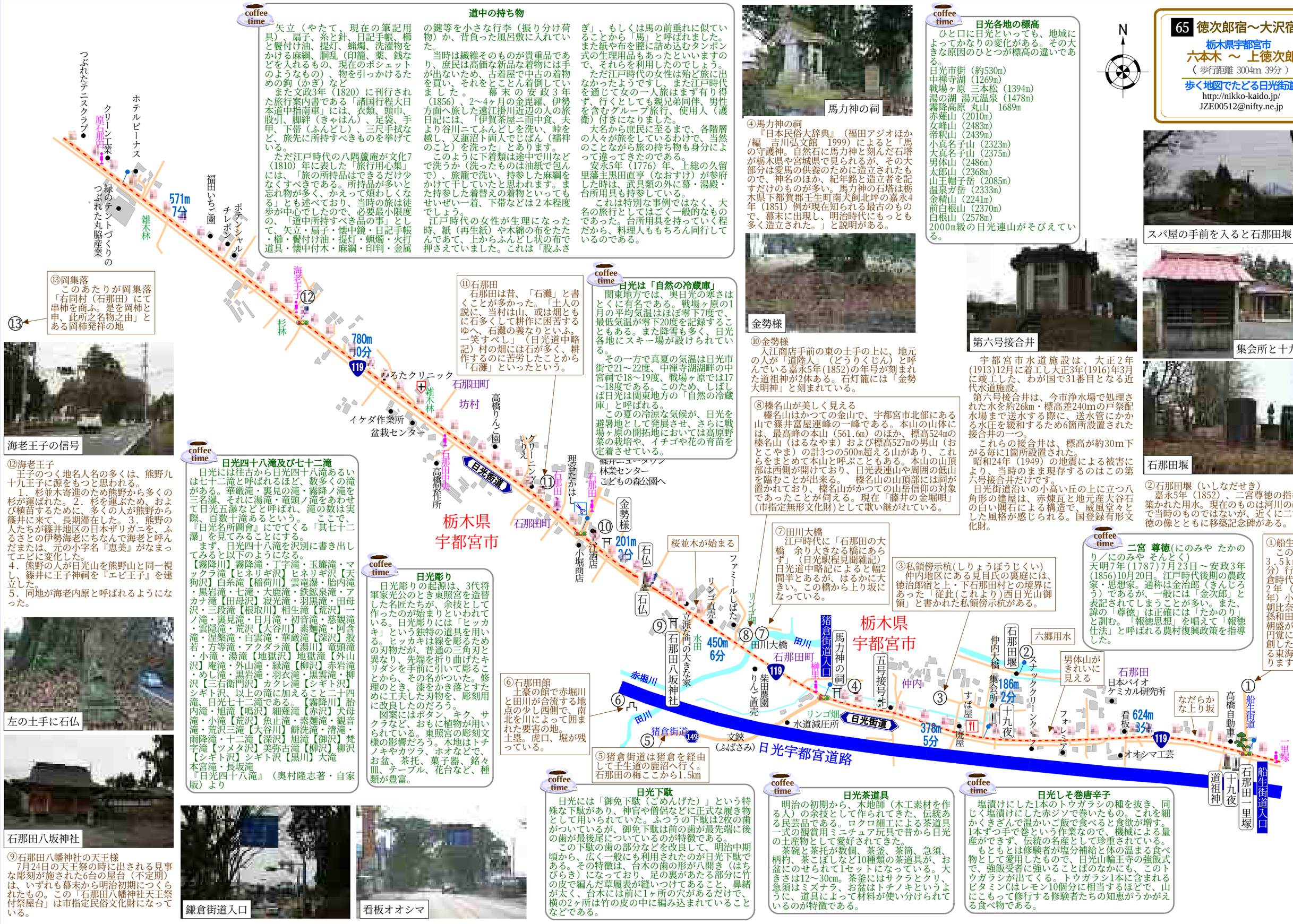
六本木 ～ 上徳次郎

（ 歩行距離 3004m 39分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp



coffee time 道中の持ち物

矢立（やたて、現在の筆記用具）、扇子、糸と針、日記手帳、櫛と鬢付け油、提灯、蝋燭、洗濯物をかける麻綱、胴乱（印籠、薬、銭などを入れるもの、現在のポシェットのようなもの）、物を引っかけるための鉤（かぎ）など

また文政3年（1820）に刊行された旅行案内書である「諸国行程大日本道中指南車」には、衣類、頭巾、股引、脚絆（きゃはん）、足袋、手甲、下帯（ふんどし）、三尺手拭など、旅先に所持すべきものを挙げている。

ただ江戸時代の八隅蘆庵が文化7（1810）年に表した「旅行用心集」には、「旅の所持品はできるだけ少なくすべきである。所持品が多いと忘れ物が多く、かえって煩わしくなる」とも述べており、当時の旅は徒歩が中心でしたので、必要最小限度の、「道中所持すべき品の事」として、矢立・扇子・懐中鏡・日記手帳・櫛・鬢付け油・提灯・蝋燭・火打道具・懐中付木・麻綱・印判・金属の鍵等を小さな行李（振り分け荷物）か、背負った風呂敷に入れていた。

当時は繊維そのものが貴重品であり、庶民は高価な新品な着物には手が出ないため、古着屋で中古の着物を買い、それをとことん着倒していました。　幕末の安政3年（1856）、2～4ヶ月の金毘羅、伊勢方面へ旅した遠江掛川近辺の人の旅日記には、「伊賀茶屋ニ而中食、夫より谷川ニてふんどしを洗い、峠を越し、又蓮沼ト両入でじばん（襦袢のこと）を洗った」とあります。

このように下着類は途中で川などで洗うか（洗ったものは油紙で包んで）、旅籠で洗い、持参した麻綱をかけて干していたと思われます。また持参した着替えの着物といってもせいぜい一着、下帯などは２本程度でしょう。

江戸時代の女性が生理になった時、紙（再生紙）や木綿の布をたたんであて、上からふんどし状の布で押さえていました。これは「股ふさぎ」、もしくは馬の前垂れに似ていることから「馬」と呼ばれました。また紙や布を膣に詰め込むタンポン式の生理用品もあったといいますので、それらを利用したのでしょう。

ただ江戸時代の女性は殆ど旅に出なかったようですし、また江戸時代を通じて女の一人旅はまず有り得ず、行くとしても親兄弟同伴、男性を含むグループ旅行、使用人（護衛）付きになりました。

大名から庶民に至るまで、各階層の人々が旅をしているわけで、当然のことながら旅の持ち物も身分によって違ってきたのである。

安永5年（1776）年、上総の久留里藩主黒田直亨（なおすけ）が参府した時は、武具類の外に幕・湯殿・台所用具も持参している。

これは特別な事例ではなく、大名の旅行としてはごく一般的なものであった。台所用具を持っていく程だから、料理人ももちろん同行しているのである。

馬力神の祠

④馬力神の祠

『日本民俗大辞典』（福田アジオほか/編　吉川弘文館　1999）によると「馬の守護神。自然石に馬力神と刻んだ石塔が栃木県や宮城県で見られるが、その大部分は愛馬の供養のために造立されたもので、神名のほか、紀年銘と造立者を記すだけのものが多い。馬力神の石塔は栃木県下都賀郡壬生町南犬飼北坪の嘉永4年（1851）例が現在知られる最古のもので、幕末に出現し、明治時代にもっとも多く造立された。」と説明がある。

金勢様

⑩金勢様

入江商店手前の東の土手の上に、地元の人が「道陸人」（どうりくじん）と呼んでいる嘉永5年(1852)の年号が刻まれた道祖神が2体ある。石灯籠には「金勢大明神」と刻まれている。

coffee time 日光各地の標高

ひと口に日光といっても、地域によってかなりの変化がある。その大きな原因のひとつが標高の違いである。

日光市街（約530m）
中禅寺湖（1269m）
戦場ヶ原 三本松（1394m）
湯の湖 湯元温泉（1478m）
霧降高原 丸山　1689m
赤薙山（2010m）
女峰山（2483m）
帝釈山（2439m）
小真名子山（2323m）
大真名子山（2375m）
男体山（2486m）
太郎山（2368m）
山王帽子岳（2085m）
温泉ガ岳（2333m）
金精山（2241m）
前白根山（2370m）
白根山（2578m）
2000m級の日光連山がそびえている。

第六号接合井

宇都宮市水道施設は、大正2年(1913)12月に着工し大正3年(1916)年3月に竣工した、わが国で31番目となる近代水道施設。

第六号接合井は、今市浄水場で処理された水を約26km・標高差240mの戸祭配水場まで送水する際に、送水管にかかる水圧を緩和するため6箇所設置された接合井の一つ。

これらの接合井は、標高が約30m下がる毎に1箇所設置された。

昭和24年（1949）の地震による被害により、当時のまま現存するのはこの第六号接合井だけです。

日光街道沿いの小高い丘の上に立つ八角形の建屋は、赤煉瓦と地元産大谷石の白い隅石による構造で、威風堂々とした風格が感じられる。国登録有形文化財。

スパ屋の手前を入ると石那田堰

集会所と十九夜

石那田堰

②石那田堰（いしなだせき）

嘉永5年（1852）、二宮尊徳の指導で築かれた用水。現在のものは河川の改良で当時のものではないが、近くに二宮尊徳の像とともに移築記念碑がある。

coffee time 二宮 尊徳(にのみや たかのり／にのみや そんとく)

天明7年(1787)7月23日～安政3年(1856)10月20日。江戸時代後期の農政家・思想家。通称は金治郎（きんじろう）であるが、一般には「金次郎」と表記されてしまうことが多い。また、諱の「尊徳」は正確には「たかのり」と訓む。　「報徳思想」を唱えて「報徳仕法」と呼ばれる農村復興政策を指導した。

①船生街道

この道を約3.5km（44分）行くと鎌倉時代の寛喜2年（1230年）小山城主朝比奈兼秀の孫和田新兵衛朝盛が出家し円覚に改め開創したとされる東海寺があります。

⑬岡集落

このあたりが岡集落「右同村（石那田）にて串柿を商ふ。是を岡柿と申、此所之名物之由」とある岡柿発祥の地

海老王子の信号

⑫海老王子

王子のつく地名人名の多くは、熊野九十九王子に源をもつと思われる。

1．杉並木寄進のため熊野から多くの杉が運ばれた。2．杉を運ぶため、およそ植苗するために、多くの人が熊野から篠井に来て、長期滞在した。3．熊野の人たちが篠井地区の日本ザリガニを、ふるさとの伊勢海老にちなんで海老と呼んだまたは、元の小字名『恵美』がなまってエビに変化した。

4．熊野の人が日光山を熊野山と同一視し、篠井に王子神祠を『エビ王子』を建立した。

5．同地が海老内原と呼ばれるようになった。

左の土手に石仏

石那田八坂神社

⑨石那田八幡神社の天王様

7月24日の天王祭の時に出される見事な彫刻が施された6台の屋台（不定期）は、いずれも幕末から明治初期につくられたもの。この「石那田八幡神社天王祭付祭屋台」は市指定民俗文化財になっている。

coffee time 日光は「自然の冷蔵庫」

関東地方では、奥日光の寒さはとくに有名である。戦場ヶ原の1月の平均気温はほぼ零下7度で、最低気温が零下20度を記録することもある。また降雪も多く、日光各地にスキー場が設けられている。

その一方で真夏の気温は日光市街で21～22度、中禅寺湖湖畔の中宮祠で18～19度、戦場ヶ原では17～18度である。このため、しばしば日光は関東地方の「自然の冷蔵庫」と呼ばれる。

この夏の冷涼な気候が、日光を避暑地として発展させ、さらに戦場ヶ原の開拓地においては高原野菜の栽培や、イチゴや花の育苗を定着させている。

⑪石那田

石那田は昔、「石灘」と書くことが多かった。「土人の説に、当村は山、或は畑ともに石多くして耕作に困苦するゆへ、石灘の義なりといふ。一笑すべし」（日光道中略記）村の畑には石が多く、耕作するのに苦労したことから「石灘」といったという。

⑧榛名山が美しく見える

榛名山はかつての金山で、宇都宮市北部にある山で篠井富屋連峰の一峰である。本山の山体には、最高峰の本山（561.6m）のほか、標高524mの榛名山（はるなやま）および標高527mの男山（おとこやま）の計3つの500m超える山があり、これらをまとめて本山と呼ぶこともある。本山の山頂部は西側が開けており、日光表連山や周囲の低山を臨むことが出来る。　榛名山の山頂部には祠が置かれており、榛名山がかつての山岳信仰の対象であったことが伺える。現在「藤井の金堀唄」(市指定無形文化財)として歌い継がれている。

⑦田川大橋

江戸時代に「石那田の大橋　余り大きなる橋にあらず」（日光駅程見聞雑記）日光道中略記によると幅2間半とあるが、はるかに大きい。この橋から上り坂になっている。

桜並木が始まる

③私領傍示杭(しりょうぼうじくい)

仲内地区にある見目氏の裏庭には、徳治郎宿と上・下石那田村との境界にあった「従此(これより)西日光山御領」と書かれた私領傍示杭がある。

⑥石那田館

土豪の館で赤堀川と田川が合流する地点の少し西側で、南北を川によって囲まれた要害の地。土塁。虎口、堀が残っている。

⑤猪倉街道は猪倉を経由して壬生道の鹿沼へ行く。石那田の梅ここから1.5km

coffee time 日光四十八滝及び七十二滝

日光には往古から日光四十八滝あるいは七十二滝と呼ばれるほど、数多くの滝がある。華厳滝・裏見の滝・霧降ノ滝を三名瀑、それに湯滝・竜頭ノ滝をあわせて日光五瀑などと呼ばれ、滝の数は実際、百数十滝あるという。　ここで、『日光名所圖會』にでてくる「其七十二瀑」を見てみることにする。

まず、日光四十八滝を沢別に書き出してみると以下のようになる。

【霧降川】霧降滝・丁字滝・玉簾滝・マックラ滝【ヒネリギ沢】ヒネリギ沢【天狗沢】白糸滝【稲荷川】雲竜瀑・胎内滝・黒岩滝・七滝・大鹿滝・鉄鉱泉滝・アカナ滝【田母沢】寂光滝・羽黒滝・田母沢・三段滝【根取川】相生滝【荒沢】一ノ滝・裏見滝・日月滝・初音滝・慈観滝・雲隠滝・荒沢【大谷川】素麺滝・阿含滝・涅槃滝・白雲滝・華厳滝【深沢】般若・方等滝・アクダラ滝【湯川】竜頭滝・小滝・湯滝【地獄沢】地獄滝【外山沢】庵滝・外山滝・緑滝【柳沢】赤岩滝・めし滝・黒岩滝・羽衣滝・黒雲滝・柳沢【三右衛門沢】カクレ滝【シギト沢】シギト沢、以上の滝に加えること二十四滝、日光七十二滝である。【霧降川】胎内滝・旭滝【鳴沢】細薙滝【赤沢】犬母滝・小滝【荒沢】魚止滝・素麺滝・観音滝・荒沢三滝【大谷川】餅洗滝・清滝・雨降滝・十二滝【深沢】旭滝【御沢】梵字滝【ツメタ沢】美弥古滝【柳沢】柳沢【シギト沢】シギト沢【黒川】大滝

本宮滝・長坂滝

『日光四十八滝』（奥村隆志著・自家版）より

coffee time 日光彫り

日光彫りの起源は、3代将軍家光公のとき東照宮を造替した名匠たちが、余技として作ったのが始まりといわれている。日光彫りには「ヒッカキ」という独特の道具を用いる。ヒッカキは線を彫るためのの刃物だが、普通の三角刃と異なり、先端を折り曲げたキリダシを手前に引いて彫ることから、その名がついた。修理のとき、漆をかき落とすために工夫した刃物を、彫刻用に改良したのだろう。

図案にはボタン、キク、サクラなど、おもに植物が用いられている。東照宮の彫刻文様の影響だろう。木地はトチノキやカツラ、ホオなどで、お盆、茶托、菓子器、銘々皿、テーブル、花台など、種類が豊富。

鎌倉街道入口

看板オオシマ

coffee time 日光下駄

日光には「御免下駄（ごめんげた）」という特殊な下駄があり、神官や僧侶などに正式な履き物として用いられていた。ふつうの下駄は2枚の歯がついているが、御免下駄は前の歯が最先端に後の歯が最後尾についているのが特徴である。

この下駄の歯の部分などを改良して、明治中期頃から、広く一般にも利用されたのが日光下駄である。その特徴は、台木の歯の形が八開き（はちびらき）になっており、足の裏があたる部分に竹の皮で編んだ草履表が縫いつけてあること、鼻緒が太く、台木には前に1ヶ所の穴があるだけで、横の2ヶ所は竹の皮の中に編み込まれていることなどである。

coffee time 日光茶道具

明治の初期から、木地師（木工素材を作る人）の余技として作られてきた、伝統あるる民芸品である。ロクロ細工による茶道具一式の観賞用ミニチュア玩具で昔から日光の土産物として愛好されてきた。

茶碗と茶托が数個、茶釜、茶筒、急須、柄杓、茶こぼしなど10種類の茶道具が、お盆にのせられて1セットになっている。大きさは12～30cm。茶釜にはサクラとクリ、急須はミズナラ、お盆はトチノキというように、道具によって材料が使い分けられているのが特徴である。

coffee time 日光しそ巻唐辛子

塩漬けにした1本のトウガラシの種を抜き、同じく塩漬けにした赤ジソで巻いたもの。これを細かくきざんで温かいご飯で食べると食欲が増す。1本ずつ手で巻という作業なので、機械による量産ができず、伝統の名産として珍重されている。

もともとは修験者が塩分補給と体の温まる食べ物として愛用したもので、日光山輪王寺の強飯式で、強飯受者に強いることばのなかにも、このトウガラシが出てくる。トウガラシ1本に含まれるビタミンCはレモン10個分に相当するほどで、山にこもって修行する修験者たちの知恵がうかがえる食べ物である。